

# バハレーン日本人学校におけるグローバル人材の育成

—— グローバル人材育成の学校経営への位置づけ

ローカルからグローバルさらにユニバーサルへ ——

前バハレーン日本人学校 校長

奈良県生駒市立真弓小学校 教頭 吉川 雄一

キーワード：国際化，グローバル ユニバーサル，バイリンガル，品性

## 1. はじめに

「国際化に対応した人材の育成」が学校の教育目標に掲げられている学校も多いのではなかろうか。このことを戦後史から考えてみる。日本は敗戦からしばらくは、戦争で機能を失った日本国内の産業や社会インフラを回復・整備するのに必死であった。戦後10年もすると国内も落ち着き、商品販路を海外に求めつつ、戦前に断交した諸外国との平和外交も始まった。日本が本格的に海外とビジネスや文化交流を行い始めたのは日本が高度成長を始めた昭和30年代以降であった。当時の国際化とは「日本と外国」の違いを認識して、それにどのように「対応」するかがその中心課題であった。日本対米国、日本対東南アジアのように日本とその他の国々と2つの対立軸で国際化は推進された。確かに物理的にも心情的にも日本と外国は遠かったのである。日本人の海外渡航が自由化されたのは昭和39年（1964）であったが、それ以降日本人の海外進出はめざましくアジア始め欧米各国、中東、アフリカへとビジネスチャンスを求めて日本企業は世界へ拡散していった。順調な経済発展に伴い「これからは国際化社会」とばかりに義務教育学校では英語授業が強化され、そればかりでなく民間の英会話学校も多く開かれるようになり英語学習熱もしだいに高くなっていった。それで、英語を媒介とした昨今の「グローバル社会」の発現である。

## 2. グローバル社会とは何か

### (1) 現状

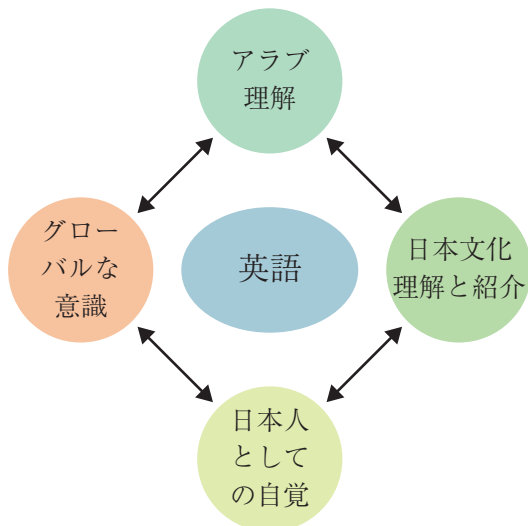
現在、世界は「国際化」ではなく「グローバル化」がキーワードになっている。新聞・TV・インターネットなどのメディアを通じて情報が流されて、世界経済危機、気候変動、資源・エネルギー、人の移動、環境破壊、テロなど様々な問題が地球規模で山積みとなっていることが人々の共通認識となっている。各国の独自対応ではどうにも出来ない状況になっており、こうしたグローバルな課題を解決していくことができるのはグローバルな人材であることに異論はないであろう。ローカルな思考（日本が世界で生き残っていけばよい、とする発想）をもつ限り、日本人がこうした課題解決に向けて動き始めることはないのは自明のことである。グローバルな課題の解決に向け、グローバル人材は世界にある日本人や補習校等の海外教育施設の児童生徒に期待が集まっている。彼らがフロントランナーになるのであるから、教育者の責は重い。

### (2) バーレーン王国とグローバル社会

私が赴任したバーレーン王国は湾岸で最も早く石油が発見された地であり、豊かな資源を背景に奄美大島規模の小国でありながら中東のビジネス拠点の1つとして栄えている。過去イギリスの統治下にあったとはいえ、英語を武器に欧米とのビジネスを発展させている。この国の人口の半分以上は外国人であり、英語が理解できないとはなはだ不便になるだけでなく、経済的にも不利益を被るのである。またほとんどの私立学校が国際学校としてバーレーン人だけでなく世界中の国の子どもにその門戸を開いている。残念ながら、国籍を入学条件にしている学校はバハレーン日本人学校のみである。国際学校（インター校と呼ぶ）では授業は英語でおこなわれ、その卒業生の多くは欧米を中心に高度な知識を求め留学している。バハレーン日本人学校と交流をもつ現地校のバヤ

ンスクールのミッションステートメントには「バイリンガルな児童生徒は英語による授業で育成される」と明記している。むしろアラビア語がセカンド言語になっているケースもあり、バーレーン教育省も「アラビア語の苦手なバーレーン人・アラビア人」に危機感を持ち、アラビア語指導を強化する取り組みを始めているくらいである。

### 3. 交流活動から始めるグローバル人材開発



学校間交流プログラムのイメージ

ではどのように本校で推進しているのか、具体的に示す。この目標の達成は、グローバルな人材育成の観点から、特に在外教育施設で教育にあたる我々の大きな使命であると考えている。また同じく指導要領の改善事項として、「伝統や文化に関する教育の充実」があげられているが、本校においては、児童生徒が日本人としての自覚と誇りを獲得して自己のアイデンティティを確立する絶好の場として交流活動での「茶道」「遊び」「伝統文化や習慣」をその中心にして計画、実践している。同時に日頃学習している英語とアラビア語の学習成果の発表の場ともしている。

#### 具体的な取り組み例

##### ○ 国際学校のフレンチ校及びバヤン校との交流プログラム

- ◆柔道の紹介 ◆茶道の紹介 ◆フレンチパイの共同制作と試食 ◆日本名所風景やポケモンがプリントされた名刺渡しとメールの交換 ◆アラブと日本、子ども遊び体験 ◆アラブ菓子の試食 ◆浴衣着付け ◆書道 等々



フレンチ校（国際学校）との交流  
柔道体験の前、正座と黙想

グローバルに生きるためには、異なる文化の中に自分をおきつつ、自己を確立してゆかねばならない。海外という特別な環境の中、自国の文化を理解しその誇りを持ち、日本人としてのアイデンティティを確立しつつグローバルな視野を身につけていくことは極めて重要である。しかも全ての活動が言語（特に英語）を介して行われるという現実を認識してはじめてグローバルな活動が成り立つことに留意したい。

### 4. グローバルな価値観

具体的に学校ではどのような方向性をもって取り組んでいけば、グローバル人材を育成することができるのであろうか。これまでの交流活動から学んだその要諦は「人類が共通して評価している価値観」を持たせることである。日本だけあるいは中東だけ、キリスト教徒だけ、イスラム教信者だけではなくすべての人々に共通して尊重されることを学ばせること、また学ぶのに必要なスキルや手段を会得させることだと考える。

どのようなことにグローバルな価値観があるのだろうか。

本校が重点化して指導していることを以下挙げてみた。

バハレーン日本人学校が考えるグローバルな価値観とは

- ① 変化出来ること。周りの変化に自分も変えられること。
- ② リスクを恐れず前に進み、失敗してもやり直す積極性をもつこと。
- ③ 自分の文化に誇りを持つこと
- ④ 客観的に自分をみて、公平に（フェアに）人と接すること
- ⑤ 品性・品格をもつこと。特にマナーや行儀等。
- ⑥ おもてなしの心を持つこと。Japanese Hospitalityに誇りを持つ。
- ⑦ 健康保持能力をもつこと。自分の心と身体を常にベストに管理できる能力を持つ。
- ⑧ 偏見を持たず取り組めること。などなどである。

これらのことは児童生徒だけでなく教職員保護者も対象になることである。



そのためには、このスキルを身につける

コミュニケーション能力（自国語、外国語問わず相手の心を理解・配慮しつつ物事を進めることができる）を身につけること。

実はこうして書き出してみると、道徳の指導項目と相当部分が重なっていることに気が付く。つまりこれまで日本の学校と家庭の教育が道徳やしつけとして取り組んできたことにはグローバルな視点が多く含まれている。グローバルだからといって特別なことは必要ない。ただこれまでの教育活動の質の向上に加えて、1つひとつの教育活動がグローバルな視点から実践されることを意識することが重要と考える。スキルとしては日本語・英語を使いこなせる言語能力である。

## 5. 終わりに、課題

フレンチ校やバヤン校交流プログラムのスローガンは「英語で現地校児童生徒に日本文化を紹介したり、自分たちの知らない文化を教えてもらって友達になろう」である。「日本の伝統文化や行事の充実」について、学習指導要領における教育内容の主な改善事項として次のように示されている。伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、公共の精神の尊び、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献する主体性のある日本人を育成することを道徳教育の目標に規定。まさに本校の想定するグローバルな教育活動に他ならない。海外にある日本人学校はこの目標に向かってまさに絶好の位置にある。身近なところから取り組みが可能になっていることが最大のメリットである。

今後の日本人学校の目指す方向性として次の点を課題として提起したい。日本人学校の設立の趣旨から本校のミッションステートメントを次のように設定していた。①「共に学び、共に育つ」。②国内の学校と同等のカリキュラム。③質の高い教育活動と思考・判断・表現の能力を育成。④日本人としての誇りや自覚。⑤英語、アラビア語、異文化理解。⑥逞しく生きていく力。⑦日本人会のコミュニティーの場。

しかしながら、他のインター校の教育目標やミッションステートメントと比較してみると、やはり「グローバルな視点」が欠落していると指摘せざるを得ない。児童生徒がグローバルに生きるために、どのような方向性、スタンス、あるいはベクトルをもたせるかという点において物足りなさを感じる。本校を含む日本人学校がグローバル化の視点を持ち実践していくことこそが、児童生徒の将来がグローバルに展開していくことにつながっていくと確信している。

本校では国際化社会やグローバル社会からさらに一歩すすんだ「ユニバーサル社会に生きる」ユニバーサルな人材が必要ではないだろうかと考えている。ユニバーサルとは「宇宙の」とか「普遍的な」という意味であるが、

ここではグローバルを包み込んだ意味として使っている。人類の将来を見据えた観点から国・民族・宗教等の利害損得をのり超えて思考する人材を育成することが将来の私たちの子孫の繁栄や幸せに繋がっていくのではないだろうか。そのイメージとしては宇宙船「地球号」に乗っている人ではなくて、宇宙から地球を見ている客観的で冷静な「存在」といったところであろうか。民族・人種・国家・思想・宗教などの枠を超えて物事をとらえ判断し実行できる人材の育成に意識を持っていきたいと考えている。